

Title	スティグマの表象：エイズと現代文学
Sub Title	Représentations du stigmaté : le sida et la littérature contemporaine
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kosei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.89, (2005. 12) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	立仙順朗教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00890001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00890001-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ステイグマの表象——エイズと現代文学

小倉 孝誠

### 現代の病いの風景

現代人を苦しめる、あるいは不安に陥れる病いは慢性病や変性疾患であり、中世の疫病や十九世紀の結核や梅毒と位相を異にしている。現在ではペストはもはや消滅したと言われるし、少なくとも先進国では梅毒や結核は不治の病気ではない。O-1157による食中毒やSARSのように、集団的な感染症が突発的におそいかかることはあるが、それは現代の病気の典型的なかたちではない。現代のわれわれが「病人」という言葉で思い浮かべるのは、インフルエンザで寝込んでいる人や、鬱病で精神科に通う人や、人工透析をする慢性腎不全患者や、ガンで闘病生活をおくる人や、検診でなにかしら異常が発見された人であろう。

かつて猛威をふるった集団的な疫病と異なり、現代の病いは個人的なものである。自分が病気だということは、友人や隣人もまた病気だということを意味しない。現代の病気は個別的なものであり、病人はしばしば孤独なのだ。そしてその孤独は、医学によって抑止できない、あるいは完全に治癒できない病い、したがって他者に告白しづらい病いに冒されていると知った者ほど、とりわけ強く感じているにちがいない。たとえばガン患者がそうであるように……。フラ

ンスの新聞・雑誌に掲載される死亡欄のなかで、ガンで死んだ人は「長く苦しい病いの末に」亡くなったと記される。中世のペストと違って、病いはもはや神によって下された罰と見なされるわけではないし、避けがたい宿命でもない。また十九世紀の結核のように、ある種の情熱や創造性と結びつけて語られることもない。医学の知が病気を疫学的に解明し、謎の領域を減らしていくにつれて、かつてさまざまな病気に付着していた神話と幻想がしだいに払拭されたのである。

現代の病気は職業や、環境や、社会や、政治との関連で語られることが多い。日本を例にとれば、水俣病など高度成長時代に頻発した公害病はその最たるもので、そこでは産業と政治と環境が密接にからまっていた。ガンについては、それがライフスタイルや社会環境に起因するという考え方があつた。ガンは確かに個人が患う病いだが、社会的なものとの関連において生じる個人の病いだといふものである。

慢性病は、ある意味でもっとも現代的な病気と言えるかもしれない。放置すれば死に至る病いを、みずから注意深く管理することによって生きながらえていく慢性病患者は、まさしく現代に典型的な病人の姿であろう。歴史的には、新たな病人が出現したのである。ここでは医学が大きな、そして決定的な効力を発揮してくれる。複雑で、しかしながら日常的なケアによって、かつてであれば助かる見込みのなかつたひとたちを医学は生き永らえさせることができるからである。

ところが、このような現代の病いの風景を一変させるような、恐るべき病いが一九八〇年代に出現した。エイズである。今やこの疾病は、かつての結核と同じようにさまざまに隠喩をまとわせられ、多様な、そしてときには矛盾した神話や幻想を生みだしている。病いがかつては医学の問題、したがって科学の知によって制御できると誰もが信じはじめ

ていた時代に、そうした知をあざ笑うかのような病いが現出したのである。それは謎の病いであり、同時にスキャンダラスな病い以外のなものでもなかった。

### エイズの意味づけ

死亡率の高さという点から言えば、先進国ではガンや、心臓病や、その他の生活習慣病のほうがはるかに高く、したがって一般市民にとってははるかに恐るべき病いである。エイズの特徴は、感染者がひとたび発病すると高い割合で死に至る病いということ、そして感染経路がはっきりしていて特定の集団が感染しやすいことから、たとえばガン患者や心臓病患者とちがって偏見や嫌悪の対象になりやすいということである。

実際、同じく死に至る病でありながら、ガン患者がそれだけで社会的な偏見にさらされ、差別されるといふことはない。ガンは感染症ではないし、ある種の行動が高い確率で発症の原因になりやすいわけではない。遺伝やライフスタイルはいくらか関係するにしても、ガン細胞の増殖を引きおこす原因が特定できるわけではない。いわば偶然、誰かにおそいかかる病いということになる。他方、エイズの場合は事情が異なる。汚染された血液から製造された輸入血液製剤を投与されて感染した血友病患者のケースは、いま除外する。彼らはおそらく、旧厚生省の不手際にもとづく不備な保健行政の犠牲者であり、感染はみずからに責任のないまったくの災難にほかならない。しかし、すでに感染しているひとの体液（血液や精液）から感染する確率が高く、感染者に同性愛者や麻薬常習者が多いという事実がある。そのような患者はいわば「身に覚えのある」ひとたちであり、感染を知った家族や周囲の人々からは非難と差別をうけやすく、本人はみずから責める傾向が強い。当然、発病後は行動やライフスタイルのうえで制約をこうむらざるをえない。

あらためて言うまでもないと思うが、エイズ（後天性免疫不全症候群）とはある単一の疾病につけられた名称ではない。さまざまな理由から人体の免疫機能が低下し、外部から入ってくる多様なウイルスに対抗できなくなり、肺炎や肉腫などを発症する致死的な病気である。それにもかかわらず、何か単一の病気であるかのようにしばしば見なされるし、いまだに正体は完全に解明されておらず、治療の難しい病気ということで、さまざまな隠喩に飾り立てられることになった。

スーザン・ソントグは『エイズとその隠喩』（一九八九）のなかで、エイズをめぐる隠喩をいくつか識別している<sup>2</sup>。ミクロの過程として語られるときはガンと同じように「侵略」とされ、病いの伝達プロセスが強調されるときは、梅毒を想起させるような古めかしい「汚染」という隠喩が持ちだされる。梅毒と結びつけて語られるのは、どちらも性感感染症であり、同性愛や乱交や売買春といった逸脱した性行動に原因があるからだ。梅毒もエイズも最終的には症状が身体の表面にあらわれ、身体をおぞましく変形させてしまう忌まわしい病いである。それは過ちにたいする当然の報いであり、罪にたいする罰であり、神が投げかけた呪いとさえ言える。ガンが本人の意思に関係なく個人に降りかかる個別的な病いであるとするならば、エイズは梅毒と同じく、本人が自覚的な行動によってみずから招いてしまう病いであり、したがって危険な集団をおそう病いである。少なくとも先進諸国において、そこにはみだらで頹廢した社会にたいする神の処罰、というイメージがついて回っているのだ。

エレイン・シウォールターがアメリカの例にそくしながら指摘したように<sup>3</sup>、梅毒とエイズが生みだした社会的な意味づけには、もちろん重要な差異もある。梅毒の場合、患者や危険集団が病いを語り、声高にうったえるということがほとんどなかったという意味で、匿名者の病いだが、他方エイズ患者は、みずからそうであることを宣言するののため

らわれない饒舌な患者たちである。エイズは、ゲイや麻薬常用者のアイデンティティを構成する要素のひとつにさえなっている。またエイズは、きわめて政治色の強い文化活動をもたらした。主として都市部のゲイによって結成されたグループが、人種的なマイノリティを巻き込んで、エイズの検査、治療のための予算増額を求め、差別政策に異議申し立てするデモを組織するなどした。梅毒は、このように政治的な病気ではない。

いずれにしても、エイズは集団表象のレベルでさまざまな重いステイグマを刻印される病いになった。そしてかつての梅毒や結核がそうであったように、文学の領域では一連のテーマを生みだした。エイズという病いはずで「エイズ文学」と呼べるほどの作品群を創造しているし、今後も創造していくだろう。作家自身が患者である場合は、告白的な体験文学の様相を呈するし、そうでない場合は、身近にいた患者の病いと死をめぐる貴重な証言記録である。

前者の例が、たとえばジュリエット著『なぜ私がエイズ患者の告白』（一九八七）であろう。これはパリのマスコミ界で活躍する著名な美貌ジャーナリストだった女性が恋人からエイズを移され、懊悩と絶望に沈み、自分の人生を取り戻そうとするかのように男たちと放縦な性関係をもつという、赤裸々な告白録である。匿名で出版されたものの、関係者には作者が誰かすぐに分かるような内容で、作者の知名度と告白の大胆さによって、スキャンダラスな衝撃をもたらした。

後者のカテゴリーに属する作品としては、アメリカの現代作家レベッカ・ブラウンの『体の贈り物』（一九九四）が挙げられよう。一人の女性ソーシャルワーカーが、自宅やホスピスでエイズ患者をケアし、その死を看取るといふ物語である。患者たちの症状はまちまちだが、誰もが最後は死んでいく。患者自身の病気にたいする意識や、醜く歪んでいく身体の認識を詳しく述べるのではなく、患者と彼らを看取る者の交流をとおして、いわばエイズを外側から見た作品

である。ガンをめぐって、患者がみずから書き記した闘病記と、看病にあたった身内の看取りの記録という二種類の文学が存在するように、エイズの場合もまた、自伝的な試みと観察記録という二つの異なるカテゴリーの言説を生みだした。

両方の側面をもつのは、アメリカの作家クリストファー・デイヴィスの『はくと彼が幸せだった頃』（一九八八）である。<sup>6</sup>これは、ゲイでエイズを患う主人公アンディの一人称形式で語られる回想記体の小説である。

やさしい両親のもと、音楽を愛しピアノを習いながら育ったアンディは、夏休み中に出かけたリゾート地で自分が同性愛者であることを自覚する。やがてニューヨークに移ってコロンビア大学に入学すると、ファイアーアイランド（有名なゲイシーン）に入り浸って男漁りをするようになる。こうして恋人になるのが、五歳年上の美しく逞しい青年テディ。セックスと酒とドラッグに溺れ、喧嘩と和解を繰り返しながら、やがて二人の不和は決定的となり別れる。五年後、あるホテルの前で再会した時、エイズを発病したテディは別人のように変わり果てていた。身寄りも金もないテディをアンディは自分のアパートに引き取り、世話をする。憐れみを拒みつつも、テディはしだいに衰弱し、痛みにあえぎ、最後は病院でモルヒネの静脈注射を打たれながら死んでいく。テディの死の直後からアンディも体調不良になり、自分もまたエイズに感染していることを告げられる。死期が迫るのを感じながら、彼は過ぎ去りし幸福の日々を回想する。

この作品は、愛する友人たちがエイズを発症するのを目にし、みずからも発病する男を登場させる。エイズは他者の病いであり、同時に自己の病いである。アンディはエイズに蝕まれた友人たちを観察し、看取り、彼らの苦痛を分かちあう。他方でゲイであることをカミングアウトした彼は家族から冷淡にされるが、エイズで死が近いと分かった時、家

族との和解が成り立つ。エイズという死に至る病いがゲイという特殊な状況をいわば免責し、家族の愛とやさしさを復活させる。ゲイ行動はエイズの危険性を高めるが、いったん発病すると、その悲劇性がゲイの反社会性を払拭するかのよう<sup>7</sup>に作用するのだ。当初は嫌悪を生じさせるが、エイズという病いは最終的にはその嫌悪を解消させ、不和だった家族の融和をもたらす。そしてエイズ患者の周囲には連帯と赦しの絆が結ばれるのである。アンディはティイとの生活でそのことを体験し、みずからが発病した後は自分自身の周りでそのことを再確認する。

日本では、一九九〇年代に話題を呼んだテレビドラマのノベライズ版である浅野妙子の『神様、もう少しだけ』（一九九八）が、エイズの問題を真正面からあつかった作品である。女子高生・真生は援助交際で一度だけ性交渉をもった男からエイズウイルスを移される。エイズに感染していると知った時の主人公の絶望、家族や友人たちの無理解と冷たさは、デイヴィスの作品と共通するテーマである。やがて一人の男を愛するようになった彼女は、その愛のなかにみずからの生の意味づけを見出す。エイズという病いは、残された年月、限られた時間のなかで生きることの意味をあらためて問いかけさせる。いくらかメロドラマ的なこの作品は、普段は生や死を考えることのない人々が、エイズに直面することに<sup>8</sup>よって否応なくそのことを考えるようになる経緯をあざやかに語る。エイズという死病は、生と愛にかんする思索を導く。

ではフランス文学はどうなのか。以下のページにおいては、一九八〇年代後半から一九九〇年代にかけて発表されたいくつかの作品を取り上げて、文学のなかでエイズがどのように表象されてきたかを検証してみる。それをつうじて、現代社会でエイズが帯びている神話的な様相を明らかにしてみよう。

ドミニック・フェルナンデス『除け者の栄光』（一九八七）

『除け者の栄光』は、エイズをテーマ化した世界最初の小説と言われる。

これは二十五歳の青年、法学部の学生マルクと、四十二歳の作家ベルナルの愛と死の物語である。同性愛者の二人は三年前から同居し、自分たちがゲイであることを隠していない。パリの道徳的に厳格な家庭に生まれ育ったベルナルは、同性愛者であるという理由で両親と不和になり、ほとんど絶縁状態である。マルクのほうも、みずからの同性愛的傾向に気づいてからは家族、とりわけ新聞記者の兄と疎遠だ。友人や仕事仲間には恵まれているが、家族の絆という面から言えば、彼らは孤立している。というよりむしろ二人は、少なくともベルナルは、「同性愛者」というレッテルが含意していた断罪と排除を積極的に引き受けることによつて、みずからのアイデンティティを構築したのだった。

時代はもちろん変わった。一九六八年の「五月革命」以降、風俗や性道德の解放は急速にすすみ、首都パリでは同性愛者であるといだけで露骨な差別にさらされたりはしない。「カミングアウト」するのが一般的ではないにしても、ことさら隠蔽すべきことでもない。五月革命後に生まれた世代に属するマルクにとつてそれは自明のことだし、ベルナルがふだん付き合っている作家、批評家、出版関係の人々のあいだでも、その点で寛容な精神が行き渡っているはずである。そしてベルナルは〈夜の外出〉と称して、ときどき同性愛者たちの巢窟に足を運んでいる。

そうしたなか、状況をドラスティックに変える事件が発生する。エイズの出現である。ある夜、エイズの恐怖と悲惨を伝えるアメリカのテレビ番組が放映されると、たちまちエイズは「新しいペスト」になる。新しいペスト、すなわちこれは呪われた集団の病いであり、確実に死に至る病いであり、したがって社会そのものを脅かす病いなのだ。アメリカ

カでは神が罪深き者たちに下したもうた罰だ、と主張する人々がいるというではないか。旧約聖書に出てくるソドムの町が、あまりに頹廢したせいで神が天から降らせた業火によって滅びたように、エイズは墮落した現代社会に下された天罰ではないのか。放映の翌日から、行きつけの肉屋の主人がもつともらしい口実をもうけて握手を拒み、近所の顔見知りの花屋がよそよそしい態度を取り始めたことに、マルクは気づく。ゲイはエイズと同義語という偏見がさせた身ぶりである。しかしマルクは彼らの無知蒙昧に憐憫を感じこそすれ、彼らを恨む気持ちはまったくない。

エイズをめぐってマルクとベルナルが意見を交わすとき、二人の考え方の違いが浮き彫りになる。マルクにとってエイズはたんなる病気のひとつであって、そこに過剰な意味づけをしてはならない。かつて梅毒がもっていたような、いかにも黴臭い断罪と排除の表象をそこに付着させてはならないのだ。アメリカの世論の一部は、エイズは神が頹廢したソドムの民に下した罰のようなものだと言明しているが、マルクはそうした考えを一笑に付す。「僕に言わせれば、いちばん大事なのは聖書の話などほっといて、エイズは天罰なんかとまったく関係ないと人々に向かって言ってやることなんだ。白血球の問題に超自然的な意味を求めないでほしい。エイズは宗教の問題じゃない、エイズは倫理の問題じゃない、もっぱら科学の問題なんだ」。

他方ベルナルは、エイズを疫学上の問題に還元することはない。それが神の罰とするのは蒙昧な偏見であるにしても、すべてのひとがマルクのように科学だけの問題と割り切れるわけではないのだ、とベルナルは反論する。

自分がこの謎の腐敗のせいで死ぬとを感じる人間は、自分の人生についてつくづく考え、自問せずにはいられない。なぜ自分がエイズになったのか、何をしたいせいでこんな結末になったのか、と。たとえ神を信じていなくても、ひ

とは皆、馬鹿でない限り、自分は世界の秩序の中にしかるべく組みこまれていと思つてゐるものさ。もし自分が感染することになったら、僕はいさぎよく反省し、今までの自分の生き方のどこが世界の秩序に背いていたのか、わが胸に聞いてみるつもりだ。

予期されていたように、やがてベルナールはエイズを発症する。友人、作家仲間、出版社の人々はマルクに電話して彼の容態を訊ねはするが、多忙とか、都合がつかないとかなにかと口実を設けて見舞いにはやつて来ない。エイズ患者がいる部屋に入ることを拒んでゐるのだ。エイズ患者は孤独である。そしてベルナールは孤独をみずからすすんで選びとつたのであり、友人や同業者から打ち棄てられた寂寞感をまるで望んでいたかのように受け入れる。もつとも、エイズ発症後はベルナール自身の思考と感情が直接語られることはなく、もつぱらマルクを介して読者はそれを知るだけなのだが。

同性愛者で、そうしたひとたちが蝟集する界限に足繁く通い、エイズに感染したベルナールは、作家としても悪意に満ちた中傷にさらされる。あの格調高い文体はまやかしだった、ロマン派的なポーズで読者を惑わしていたにすぎない、云々。彼が書いた初めての戯曲で、エイズの悲劇をあつかつた作品はなかなか上演に至らない。エイズに感染したことが、それ以前の彼の作家活動の意義までも無に帰せしめてしまうかのように、社会は彼を排斥し、葬ろうとする。「同性愛者のエイズ作家」——それは二重の意味でまさに呪われた除け者として、この作品中に描かれてゐるのである。

そしてベルナールはまさに、自分が同性愛者であるがゆえにエイズに感染し、その結果人々から嫌悪され、見捨てられ、除け者として死んでいくことが自分にとっての栄光だと考へるのである。家族にとっておぞましい恥辱であり、社

会にとつていまわしい呪詛としてみずからの同性愛を生きてきた古い世代の人間である彼は、いまエイズというステイグマ<sup>1</sup>聖痕を身体に刻印された。そのステイグマを最後まで引き受けなければならない。そうでなければ、彼の生と死に意味はない。

当初はベルナルの態度を理解できなかったマルクだが、彼がエイズで寝たきりになってから彼の思考の變に分け入るようになる。ベルナルが呪われた者として孤独のなかで死んでいくことこそが、実は彼が栄光ある作家として聖別されるための条件だということを了解するのである。だからこそ、最後まで忠実なただ一人の眞の友人ニコルが、ベルナルのエイズ感染は同性愛的な行動のせいではなく、かつて手術を受けた際に輸血された血液が汚染されていたからなのだと告げて、それを彼に伝言しようとしな。手術が施された病院で使われていた汚染血液の件を報道する新聞記事をニコルは持参するが、それさえ受け取ろうとしない。愛する男を光輝ある除け者として死なせてやるのが、彼にたいするマルクの最後の、そして最大の愛の証にはかならないからだ。マルクはニコルに向かって次のように述べる。

彼（＝ベルナル）にとつてエイズは……神の摂理のようなものだったのです。そのおかげで、彼は自分自身と折り合いをつけたのです。幸福と成功を求めてあちこちさまよった末に、病気になる、除け者にされ、孤独を知り、ひっそり暮らすことによつて、彼は自己の統一性と深い眞実をあらためて見出したのです。<sup>11</sup>

この作品におけるエイズの意味は、この短い一節に凝縮されている。エイズとは、みずから引き受けた孤高と排除のメタファーにほかならない。

## エルヴェ・ギベールとエイズの表象

エイズと文学という主題の系譜から言えば、フェルナンデスの『除け者の栄光』は先駆的な作品であり、見事な達成であるが、一般読者のあいだでの知名度という点ではエルヴェ・ギベールに軍配が上がるだろう。同性愛者であり、数多くのパートナーと関係をもち、エイズで死んだ彼が、みずからの病いと絶望を語った『ぼくの命を救ってくれなかつた友へ』（一九九〇）と、その続篇『憐れみの処方箋』（一九九一）は、著名な哲学者や女優を偽名とはいえフランスの読者にはつきりと分かるかたちで登場させたということもあって、スキヤングラスな評判をえた二作品である。『除け者の栄光』が三人称で書かれた小説であるのに対し、ギベールの作品は作者自身の一人称体で綴られている。

「ぼくは三カ月間エイズだった。もつと正確に言えば、三カ月間、エイズという名のこの死病に冒され、助かる見込みはないと思っていた」。『ぼくの命を救ってくれなかつた友へ』は、このような衝撃的な書き出しから始まる。一般にエイズを物語る作品では、主人公がエイズに感染していると医師から宣告される瞬間が、特権的な場面のひとつを構成するのだが（前述したデイヴィスの『ぼくと彼が幸せだった頃』や、ジュリエット作『なぜ私が』もその例）、ここではエイズを発病していることがすでに既成事実として読者に告げられるところから、物語が始動していく。その後は、遠からずやって来る避けがたい死までの猶予期間を、絶え間ない不安と、刹那的な欲望のなかで生きていかざるをえない作家の絶望的な営みが語られる。

実際、ギベールは頻繁に病院に通い、担当の医師と面談し、つらい検査を繰り返しかえし、さまざまな治療を施され、多くの薬を処方される。多くのエイズ患者がそうであるように、彼もまた絶望のあまり自殺の願望に駆られる（事実ギベ

ールは一九九一年に自殺を図り、その後遺症でまもなく死ぬ。発病した当初の彼にとつて、エイズは呪われた病以外のなものでもない。「アフリカミドリザルの血液を媒介にしたエイズは魔女の病氣、呪術師の病氣なのだ」<sup>(12)</sup>。中世のペストのように、エイズは神が下した罰であるという隠喩と神話化が、ひそかに作家の心に忍びこむ。自分の症状を難解な専門用語をまじえながら記述していく彼は、まるでそれによって自分の病いを冷静に客体化しようとするかに見えるが、しかしそれは虚勢であり、進行する病いを心理的に馴致しようとする気休めの手段でしかない。

ところが、やがて作家はエイズのなかに生の充足感を保証してくれるような契機を見出すようになる。エイズは緩慢な病いである。確かに死に至る病いではあるが、死が突然におそいかかることはないから、一定の猶予期間があたえられる。その期間が患者にたいして、生の意味を見つめる時間をもたらすのだ。こうした認識は、エイズと十九世紀の結核を表象のレベルで近づける。結核もまた、避けがたく死に至る病いでありながら、患者に生きる時間と、死を迎えるために自己を凝視する時間をもたらしてくれる病いであった。

たしかに、この恐ろしい病氣には、なんとなく甘美なもの、魅惑的なものがある。もちろん、いたましい病氣ではあるけれど、急死することはないのだ。確実に死にいたる途中に踊り場やひどく長い階段があり、階段の一段一段は死への比類のない見習い期間であった。死ぬ時間をあたえてくれ、死人に生きる時間をあたえてくれる病氣、時間を発見し、つまり生を発見する時間をあたえてくれる病氣だった。アフリカミドリザルが広めた、いわば現代の天才的な発明である。不幸は、いったんその境遇におちてしまえば、予感よりもはるかに突きあいやすく、思っていたよりもさほどつらいものではなかった。生が死の予感でしかなく、いつやってくるかわからない死にたえず

びくびくしているとすれば、潜伏期間の六年間と、さらにA Z Tによって最高二年間、A Z Tがなくなると数カ月は生きられるという期限を保証してくれるエイズは、ぼくたちを生にたいして十分自覚的な人間にし、無知から解きはなつてくれるのだ。<sup>(13)</sup>

続篇である『憐れみの処方箋』において、ギベールの病いは着実に進行する。そして少なくとも表象の領域でエイズが結核と異なるのは、エイズが患者の身体を容赦なしに醜く変形させていくという事実である。輝くばかりに美しかった青年の肉体は、おぞましい老人の肉体に変わる。いかなる幻想も許さないような、絶望的な肉体の変貌——それもまたエイズ文学に通底するテーマのひとつである。先にふれたデイヴィスの『ぼくと彼が幸せだった頃』では、痩せこけ、皺が寄り、顔が黒ずんでしまい、それを隠すためにメイキャップをほどこしたデイの肉体が描かれる。また主人公のもう一人の友人でやはりエイズに冒された青年が、彼の眼前で無言のままシャツを脱ぎ、ズボンを膝まで押し下げて黒っぽい紫斑に覆われた肌を見せた時、主人公は思わず目を背けてしまう。『除け者の栄光』では、ベルナルの身体的変化は描かれていないが、彼が友人の務める病院に行った時に見たエイズ患者の痩せこけて骸骨のようになった体や、黒ずんで皺だらけになった顔や、崩れた皮膚がなまなましく描写されている。

変貌する肉体はみずからのものであり、そしてとりわけ他の患者たちのものである。『憐れみの処方箋』の作家は、病院で目にしたエイズ患者たちを次のように描写する。「今朝、ロスチャイルド病院でひどい状態にある人たちを見た。彼らはまさに燃えるような目をした若い骸で、まるでホラー映画のポスターに描かれた、墓からよろよろと出てくる死者たちのようであった」<sup>(14)</sup>。

結核を病んだ十九世紀の青年や女性は、文学作品のなかで死の直前まで美しさを保つことができたが、現代のエイズ患者は防ぎようもなくカリニ肺炎やカポジ肉腫に冒され、身体の表面を醜悪さの侵入から守ることができない。梅毒のようにエイズは身体を腐敗させ、呪われた宿命を刻印する。梅毒と同じように恥ずべき病いであるエイズは、個人の尊厳を脅かす。とりわけ患者がギベールのような同性愛者である場合、それは個人がみずからのセクシユアリティを、したがって身体を管理できなかつたことにたいする報いという様相を呈してしまふ。エイズはステイグマであり、消しがたい負の痕跡である。

ギベールが底知れぬ絶望から救済されえたのは、ひとえに書くという作業によつてであつた。苦痛を抑えるためにさまざまな化学物質を服用し、不安から逃れるため麻薬に頼つてまで、彼は希望を抱き、奮い立ち、生き、書くための力を手に入れようとする。書くことによつて死の恐怖と闘い、書くことによつて生を実感するしかなかつたからである。エイズが彼に創造性を付与した、あるいは彼の創造性を高めたというのは正しくないだろう。エイズの周辺には、まだ結核のような創造性の神話は紡がれていない。避けがたく近づく死が、今を生きようとする欲望を刺激したということである。そしてギベールにとつて、生きることは書くことであり、書くことが生きることであつた。作家であり続けることが、生きるための唯一の正当化になつた。

ぼくは危険な領域に入つても、自分の生存や永遠の生命といった幻想を持ちたかつた。たしかにそれは重病の患者にはよくあることだ。たとえそれが哀れで滑稽なことであつても、ぼくは死をあれほど望んだすえに、今度はなんとしても生きたいと思うようになつた。<sup>(15)</sup>

『憐れみの処方箋』のなかに読まれるこの一節は、作家エルヴェ・ギベールが読者に残した最終的なメッセージでもあるだろう。

注

- (1) 病いの風景は時代によって変化する。病いとそれともなう苦痛は生理学的な現象であると同時に、社会的・文化的に構築される表象でもある。西洋における病いの表象をめぐる歴史的概観としては、次の著作が有益である。エルズリッシー／ピエレ『病人の誕生』小倉孝誠訳、藤原書店、一九九二年。Marcel Sendrail, *Histoire des maladies en Occident*, Toulouse, Privat, 1997.
- また現代世界における病いの表象をめぐる一般的な考察を展開したのはサンダー・ギルマンで、*狂気と精神病をことさら特権化するのはいかにアメリカ的だ。『病気と表象』*(本橋哲也訳、ありな書房、一九九六年)のなかでギルマンは、病んでいるのは「他者」であり、病いのイメージは本質的に差異化と排除の言説を導きやすいと主張している。
- (2) スーザン・ソング『エイズとその隠喩』富山太佳夫訳、みずず書房、一九九〇年、二二一―二三四ページ。
- (3) エレイン・ショウォールター『性のアナキー』世紀末のジェンダーと文化』富山太佳夫ほか訳、みずず書房、二〇〇〇年、第十章「梅毒とエイズの描かれ方」。
- (4) ジュリエット『なぜ私が——エイズ患者の告白』宇田川悟訳、朝日新聞社、一九八八年。
- (5) レベッカ・ブラウン『体の贈り物』柴田元幸訳、マガジンハウス、二〇〇一年。
- (6) クリストファー・デイヴィス『ぼくと彼が幸せだった頃』福田廣司訳、早川書房、一九九二年。
- (7) 浅野妙子『神様、もう少しだけ』、角川書店、一九九七年。その後、角川文庫に収められる。
- (8) 管見のかぎり、フランス文学におけるエイズの主題をめぐるはまだ総合的な研究は存在しない。次の著作にエイズと文

- 学をめぐると一章が見出される。Gérard Danou, *Le Corps souffrant. Littérature et médecine*, Champ Vallon, 1994, ch. V.
- (9) Dominique Fernandez, *La Gloire du paria*, p.146. 引用文は拙訳による。なお邦訳は『ドミニック・フェルナンデス』「除け者の栄光」榊原晃三訳、新潮社、一九八九年。
- (10) *Ibid.*, pp.146-147.
- (11) *Ibid.*, p.246.
- (12) Hervé Guibert, *A l'ami qui ne m'a pas sauvé la vie*, «Folio», 1999, p.17. 訳文は、エルヴェ・ギベール『ぼくの命を救ってくれなかつた友人』佐宗鈴夫訳、集英社文庫、一九九八年、による。
- (13) *Ibid.*, pp.192-193.
- (14) エルヴェ・ギベール『憐れみの処方箋』菊地有子訳、集英社、一九九二年、四三ページ。Hervé Guibert, *Le Protocole compassionnel*, «Folio», 1993.
- (15) 同書、一六九ページ。